
漆黒と黄金の物語+

菊澤美甘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒と黄金の物語+

【Nコード】

N8979H

【作者名】

菊澤美甘

【あらすじ】

古の時代。ヴィドールは、東の獅子サファルと西の大鷹ガサラが二大国として治められていた。ある日、ガサラ国ダーウィンの侯爵息女ウエンデイのもとに継母としてある親子が現れ、彼女の運命の歯車が…。シスコンの兄や天然なヒロイン、俺様系王子など、さまざまな人の出会いから成長していく、異世界ファンタジー。***「漆黒と黄金の物語」の続きとなります

三十一章（前書き）

「漆黒と黄金の物語」の続きとなります。読んでいない方がいましたら、そちらからお読みください。

三十一章

王都から東に馬で半日ほど走った場所にアキナスはある。

水資源が豊富で、様々な農作物を作ったりと、古くから豊かな文化が発達していた。

今は、『燃える石』があるという鉾山のある町に勢いとしては負けているが、綺麗な湖や川を使った産業を始めたのではないか、と周辺の人々では噂されていた。

しかし、それよりも恐ろしい噂が流されていた。

何でも、アキナスでも一番大きく、綺麗なカルム湖こという湖に霧がかかった日には、白い鳥が現れ、湖に迷い込んだ人間を狂わせると言われていた。その人間らは、『水が、水が!』というらしい。何があったのかは、未だに分かっていない。

*
*
*
*
*
*
*
*
*

「そ、その話……ほ、本当ですか……？」

ウェンディは乗っている栗毛のロメルにしがみついていた。

「そのための調査活動だ。まさかとは思うが、怖いのか？」

後ろからついてくるジョージアは、落ち着き払った声で呆れた様子だった。

「まっ、まさかー。何でそんな、ゆ、ゆゆゆ幽霊みたいな噂話なんて信じなくちゃいけないんですかー」

棒読みで声をはりあげる。

「そつか、それはよかつた。じゃあ、今日から調べられるね」
「えええええつ?!」

墓穴を掘ってしまったウエンディは、ロジャーのいつも以上の爽やかな笑顔を見て愕然とした。

「そのための『調査』だし」

「わ、わざわざ今日からじゃなくとも…」

「では、到着し次第始める」

ウェンディの前方で、スツと背中を伸ばしたまま馬上にいるリチャードの一言で決定事項になったようだ。

(う、ううう嘘でしょ……)

真っ青になったのに気がついたのは、肩に乗っているジンだけだった。

*
*
*
*
*
*
*
*
*

アクイナスに着くと、責任者としてリチャードとロジャーは町の長に会いに行ったようだった。その間、騎士達とウェンデイ達は湖に近い拓けた場所にテントを張っていた。

一段落したところで、ウェンディは、紫色の小さい花がたくさんついている植物の茎を持って、揺らしていた。

「ジン、何で私はこんな不運なんだろう」

何だよ急に、とジンは、振り回している花に当たらずに少し

離れたところで座っていた。

「だって、今日は、オバケに会わなきゃいけないし。昨日は王子にからかわれるし、よく分からない男にベタベタされるし——」

ジンは難しい顔でいた。

そのよく分からない男に何されたんだ、とジンは不機嫌そうに少し低いトーンで尋ねた。

「何って…いきなり至近距離に近づいてきたり、私の名前を何故か呼んだり、首に…」

ウエンディは、首に手をあてて少し青ざめた。

彼奴…^{あいつ}ぜってー許さないぞ、とジンは呪うような声色で唸っていた。

「じ、ジン…？」

そこにジョーシアが近づいてきた。

「ウエンディ——…何をしているんだ…」

ジョーシアがウエンディを見つけると、少し青ざめた虚ろな表情で振り回している『花』に注目していた。

「東の遠国で、こういうふさふさしたものでお祓いをするんです。だから、無事に帰ってこられます様になって、行く前にお祓いを——」

「分かった、分かった。但し、その花は、捨てろ。サワギキヨウは有毒だ」

えっ、とウエンディの手が止まると、投げ出した。
ジョーシアは、呆れるような表情で腕を組んでいる。

「そんなのに頼って…怖いんだろ。今回は、仕方がないから此処に残っていてもいいが」

「そんなのって何ですか。東国では、悪い霊や悪いことを追い払うのに使う神聖なものだって言って…って、残っていて良いって、ほ、本当ですか？」

毒がついてやいないかと、手を一生懸命にほろっていたのを止めた。

「ああ。騎士が行って^{おこな}くれるテントの見張りなら出来るか」

「はい!!」

満面の笑みで元気よく返事をしたが、次の言葉に顔が凍った。

「二人で」

「い、行きます…行かせてください…」

項垂れ気味なウエンディだった。

「綺麗…」

それまでの不安はどこに行ったのか、目をきらめかせて、幻想的なカルム湖見ていた。

後ろにいるであろうジンに話しかけようとふと振り返る。だが、目があったのは、至近距離で少し屈んでいるロジャーだった。

「そう？君の方が綺麗だよ？」

「ふぎあ！！」

可愛いげのない悲鳴をあげ、尻餅をついてしまった。

「そんなに驚かなくとも…。――殿下あー、やっぱり昼間に人数で来ても出てきてくれないんじゃないんですか？」

水の中を見つめながら動こうとしないリチャードに飽き飽きしたような声で言う。

加えてジョージアも口を開いた。

「殿下、私もそう思います。いくら今が日暮れ時でも、噂からすると、霧が出る日でないと出ないようですし。…第一、聖霊の起こしたもののなか、人が起こしたもののなか分からない今、分からないまま動くより少し調べないと」

何かをじっと見ていたりリチャードの目はやっと離れた。

「…そうだな。また後程にしよう」

一時撤退の声を騎士達に伝えると、皆、野営地に戻ろうと足を向けた。

ウエンディもそれについていこうと、地面に手について起き上がる
うとした。

その時だった。

ウエンディの耳に何かが聞こえた。

へ…助けて……………《光》が消え……………

「な、何？」

ジンかと思い、振り返ったが、首を振られた。

「違うの。じゃあいったい誰？」

へ…私達の《光》が消える……………助けて……………黄金の…め

「待って!!」

薄れていく声を追おうとしたが、誰かに手を引かれているのに気が
がついた。それと同時に、ウエンディは、湖に足を浸けていた。

ウエンディの手を引いていたのは、リチャードだった。そのままグ
イグイ引っ張って水から出された。

パシャパシャと水音をたてながら、出ると、手の痛みにもウエンディ
は顔を歪めた。

「で、殿下! て、手が痛いです」

ウエンディの手を力任せに握っていたからだだった。言われてから
やっと気が付いたのか、パツと放すと、腕組をして、背を向けた。

「……………勝手に湖に入るな。此の季節の水温は低い」

無愛想に言い捨てると、騎士らしい、シャンとした姿勢で野営地に帰っていった。

「…何なの、あの王子」

きょとんとしたウエンデイの顔に茜色の夕陽が写っているだけなのかは分からないが、真っ赤に火照っていた。

三十一章

夜になり、篝火を燈して、見張りの騎士が回る中、寝静まっていた。

そんな中、ウエンディはジンと再び湖に向かおうとしていた。

「よし。今よ」

騎士の視界から見えないようにタイミングを見計らって森の中に入っていた。

（さっきの正体を調べておかないと。何だか…深刻な問題に思えた）

道を覚えていくうちに、森を進んでいた。

「そういえば、王子も何だか湖の中に興味を持っていたみたいだった気がしたけど。何かあったのかな…」

そんなことよりさつきジョージアが言っていたことが気になる、とジンは走りながら呟いていた。

「ああ、『聖霊』のこと？確かに不思議よね」

*
*
*
*
*
*
*
*
*

野営地に戻って、夕食をリチャードとロジャー、ジョージアと共にとっていた。

「それで、襲われたという商人の様子はどうでしたか？」

ジョージアはゴブレットに注がれたブランデーを飲みながら言った。

「湖で喉が渴いたから飲もうとして、手を入れたら、毒のありそうな紫色に変化したらしいよ。慌てて手を出したんだけど、毒気のあ
る空気が漂ってきたように感じて、アキナスに戻ってきたんだっ
てさ。地方道から遠いこの森を何故通ろうとしたのか聞いたんだけど、それには答えてくれなかったな」

ロジャーがパンをちぎりながら、頬張っていた。

「恐らく、幻想でしょう。魔術師か聖霊のどちらかの」

「幻想…ねえ…」

「レディ・ジョージア。聖霊とは何かお教え願えるか？」

手に持っていたスプーンをリチャードは置いた。

「聖霊とは、元々、木や花、湖。時には動物にも宿ると言われる、
魔術の使える《宝石神》^{アンビジュ}の使い魔です。

その中でも何種類かに分かれます。その土地を護るためにいる《守
護聖霊》^{イデアン}。ただ単に悪戯をする目的のもの《小妖精聖霊》^{ブラウニー}。《宝石
神》^{ユイ}の使いとして地上界に降りて人間のそばにいるもの《従者聖霊

》、の大きくは三つほどに分かれていると言われます」

ウエンディの足元で十分に冷ましたミルクを飲んでいたジンは、
急にむせた。

「ちょっと。大丈夫？」

そんな様子を気にした様子なく、話は続いていた。

「今回は人間によるものでなければ、ガーディアン《守護聖霊》かブラウニー《小妖精聖霊》でしよう」

「その解決策はあるのか？」

「はい。最近、魔術師がアクィナスに現れたことがあったか、尋ねていただけますか？来ていたとなれば、魔術師を見つけさえすれば大丈夫です。ですが、もし、聖霊だとしたなら……。古来から魔術師の力が強い者は魔法陣なしで聖霊と交信してきたといえます。それを応用すれば出来ないこともないかと」

「では、よろしく頼む。ロジャーは、夜が明けたら魔術師のことを聞きに回ってくれ」

「了解」

最後の一欠けらのパンをポイツと口に投げ込んで、ロジャーは立ち上がった。

「じゃ。僕、寝るから」

「相変わらず就寝時間が早いな。寝ても背は伸びないと思うが？」

「余計なお世話だっ！」

長身のリチャードの皮肉にロジャーは、頬を膨らませてテーブルから離れて行った。

ふとウェンディの頬に風が当たり、先ほどの湖の澄んだ香りが不思議と感じられた。

「ねえ、ジョージア。聖霊って：喋ったりする？」

「いや、そんな例は聞いたことはないが……。だが、魔力が強いか聖

「霊が許した相手になら聞こえるかもな」

「…聞こえるかもしれない…：か（ですか）…」

リチャードとウェンディの声が重なったことにジョージアは驚いていたが、当の本人達はそんなことには気がつかず、互いに湖のある方向を見つめたまま腕を組んでいたのであった。

*
*
*
*
*
*
*
*
*

「いくらダーウィンが国境に近かったからと言って、伝えられてることが同じだとは思っちゃいけないのね、やっぱり。聖霊ああいうことなんて、聞いたこと無かったわ」

はあ、
とため息をつくようにとぼとぼ歩いていた。

ガサラはサファルと違って《魔術》を使うやつがそうそういないからな、と絶えずキョロキョロしているジンは真剣な声色で告げた。

「そうよね。……あれ。『そうそう』ってどういうことな——」

ジンとの会話を続けようとしたが、目の前の湖の近くに人影が見えた。

ウェンディは、腰に付けていた護身用の短刀に手をかけた。しかし、ジンは警戒した様子なく、逆に滅多にやらない『にゃー』という鳴き声まで出した。

「ちよっ…！馬鹿、ジン！！」

だが、目の前にいた人物にウエンディは啞然とした。

「り、リチャード殿下?!」

三十二章（後書き）

・・・短くてすいません。

フリッツ..本当だ。しつかりしろ、このろま作者。

す、すいません。・・・ていうか、あなた今回出てませんよね？

フリッツ..むっ。出ていないから、ここに出ているのではないかつ！

あ・・・すいません（今回三回目）。ご感想・ご指摘お待ちしております。
ります。

フリッツ..ウィンディが消えて暇すぎるっ！！

三十三章

湖の淵でしゃがみこんで、ボーツと湖底を見つめていた漆黒の瞳が煩そうにウエンディに上がった。

「ギャーギャー騒ぐな。ロジャー達にバレるだろうが」

「あ…そうですね。じゃあ、静かな声で…ってちがいますっ!!」

頭を抱えて、ウエンディもリチャードの隣にしゃがみこんだ。

これ以上大声を出そうものなら、不機嫌そうな視線に射殺いころされそうになっていたので、渋々ウエンディは声を落とした。

「な・ん・で！殿下がいるんですか？近衛騎士も副官ロジャーも連れずに」

「…お前と同じ理由だ」

「…はい？」

まだ分からないのかと言わんばかりの眉間の皺の寄り方をした。

「お前も聞こえたんだろう、あの不思議な声を？」

「も？——…あ、ああ！」

ウエンディもやっと思ひ当たった。

（（…助けて…））

囁くように途切れ途切れに頭に響いた声のことだった。

「あれって…。殿下も聖霊だと思いですか？」

リチャードは、湖に戻っていた目線をチラリとウエンディに向けた。

「魔術関連のものだというのは確かだ。ああいうものは、騎士だけなどでは、片づけられない分類だろうからな。∴それより、最初から気になっていたんだが、『物騒なもの』を持っている理由はなんだ？」

チラリとマントに隠した短刀に目が行っていた。

「た、ただの護身用ですっ！——って言うより、『初めから』って、何で分かったのですか？」

王子の探りを入れるような目から庇うように、左手を後ろにして鞘を掌で包んだ。

これはもともとは、父親から、母親の形見として貰ったものだった。だが、鏢つばについた猫科を思わせる獣の紋章を真っ先に気がついたボルトが、理由こそ言わなかったが、『形見』としてではなく、『護身用』としておくように言っていたのだ。

ウエンディの目線が泳いだことを見ると、ため息をつくように言葉を吐いた。

「服の皺だ。いくら大きなマントを羽織った所で隠しきれるものではない。——隠すつもりがあるなら、もっと『上手く』隠せ」
「……？」

最後に呆れるような台詞にウエンディは、きょとんと意味を捉えきれずにいた。

そんなウエンディにまたため息をつくとき、目線を湖底に戻した。

「ところで殿下」

「…何だ」

じつと湖底に目線は行ったままのリチャードの顔を覗き込んでみていた。

ウエンディの顔は、素できょとんとしていた。

「いや…じーっと見つめて、何が始まるのかな、と思ひまして」

「……………」

しばしの沈黙が流れた。

それから、リチャードは眉間の皺を深くして立ち上がった。

「…帰るぞ」

「え？帰るって…」

一度、野営地に向かっていた足をウエンディへと戻した。そして、有無を言わせない迫力のある低い声で吐き捨てるように言った。

「帰る・ぞ！」

「……………はい」

渋々ウエンディも立ち上がった。

だが、リチャードの方に向かおうとしたが、湖の異変に気がついて振り向いた。

リチャードもつられて振り返ると、それまで静まり返っていた湖が渦巻き始めたのだ。

「お前、早く逃げるぞ！」

通常なら有り得ないその状況に何か危険な感じがして、離れようと

した。しかし、遅かった。

「いやーっ！」

ウエンディに向かって渦巻きは、手を伸ばしていた。

「くそっ…！」

リチャードは手を伸ばし、ウエンディの伸ばしていた手を掴もうとしたが、何度も失敗した。

（（あと少し…！））

やっと掴んだ。しかし、人の力が自然の力に勝てるはずが無かった。二人は、湖の中へと引きずり込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8979h/>

漆黒と黄金の物語+

2010年10月10日07時44分発行